新編水滸畫傳

二編

三

へ21
875
13

狂歌

壹帝義樹 不精

一心壹所 投宗匠著

特
門へ遠21
875
13

神書佛書醫書圖學
繪本 手本 新古實貨
手遊いろく淨瑠璃
御注文承り上
後藤町三丁目
河内屋孫兵衛

新編水滸画傳卷之拾三

東武 高井蘭山翁 譯編

明治三十年
一月十日
謹示

○急先鋒东郭て功を爭ふ

楊志周謹が勝負楊志贏を得られ事竟るべきに索超又比試を屋出るに依て。梁中書黙止しがたく手て比試場に出て武士の武藝を見物に。比時ハ巻の上に紅旌を揺動しられ。将巻の左辺ハ金鼓齊く打鳴し。東西の陣中ハ各石炮を放つて天地を震動せるがごとく。索超まづ馬に乗て教場の内に跑入。遂ハ旗竿の下ハ立て馬を勒へ揖を揖へ。楊志ハ出るを今ハ迎へ礼俟り。將巻の上に又青旗を揮動しられ。再び金鼓の響を添る所なり。楊志ハ馬を飛せて馳く教場の内ハ馳入。直ちに旗杜の後に立て馬を住む。比時又赤旌を旗門時に揺動し。戰鼓三度打鳴して。陣の東西ハ

喊の聲大に響さる而に。正牌軍索超槍を輪して飛ぜて陳茂ふ跑出に。法人見とるに。威風堂々として。其に罕なる勇士。次ふ又戰數三ふび。お爲せバ。こを面獸楊志槍を提て躍せ。飛ぶごく陣前に馳來る。

こを粧來儼然として。実に猛しき猛將。武術の高下ハ知れど。威風猛氣。千万人ふ彷れり。彩る而に正南の方より。一人旗牌官。手に令の字の旗を持て。こを一鑽ふ飛せて。楊志索超ゞ戰るの方ふ馳乃ち大音聲を揚て。呼つて云るハ我今相公の令を承て。こを。楊志索超二人。必ず各力を尽すべし。若誤て負を取ものハ。忽ち嚴く罰を加へべし。其彷徨を知者ハ。速に厚く賞を行へべし。汝ら人変して令を違くこと勿れ。汝人ら上に分を躬め。下を低て令を承り。別て人一度にこを飛せ。教場の裏中ふ。こを。漸く近く交へ。索超大ひふ怒て槍

を舉。威を逞しふ。雲ふ楊志を刺うる。楊志も亦急に槍を揮力を發して。お迎へ。こを。の爭戰。飛龍猛虎の勢。喊き叫んで。一來一往。秘術を盡し。蘊奥を悉し。刺を躱れ退き。擊掛れ。外し。潛り。四つの人。暫は交つて。雖英。八つの手。蹄ハ乱く。盈縮に。既して又十餘合。挑ミ戰るれど。贏輸を別ず。梁中書ハ月臺の上より。是見て。天晴神妙の闘やと。一偏汗を揮り。拳を緊て。壯觀に。お辺の法友軍も。劣て。低言。称嘆。我們。多年軍中ふ立て。闘とゝれども。いまゞ。このごとく。一對の豪傑を見ず。後ふ稀有の競うると。他余を忘れ。看。恍惚。時李成。呼遣の二人。將臺の前に立て。再三。聲を發て。叫るが。私に心中に。怒ひるハ。こ者。せら。働き。等閑の業にあらず。其程久しく。闘ハ。しめバ。必ず。お傷ふ。ふ。ん。猛れ。こ。家ふ。援めて。義士。ゝ。ど。闘を休させんとして。乃旗牌官。令の字の旗を持。めて。闘を引

多させられば。れ壘の上より。又歇軍の石砲。一連に三度までおろれども。あ人の豪傑ハ。互に圍の内ふ奈ど。功を爭ふ折られむ。石砲の響き耳に入ば。盃精神を揮搜て。れ戰ふ。ゝる処に旗牌官飛ごとく馬をとめ。馳来り。大音に號で云ゝる。梁相公の令令あり。あれ先殘ひを休ム。二人是を聞て。御躊躇李成。呼延亞に。梁中書の前ふ出て。諍でゝるハ。抑両士の武藝。天に達る下なし。既くハ相公。あ人ともに。奇く羽ひなんや。梁中書これを聞て大ふ悅び。乃索超。楊志を顧ふ。に曰ハれ。あ人の英雄。稔を棄て下るし。ふ遂堵の下に来て。踞。梁中書。左右ふ命じ。白銀あ鎧。吳服あ套を元出させ。是をあ人ふ賜り。褒美していく。索超。楊志が武術。深ふ元出群ふ。我今あ人を。舉て。提轄使の職を授く。向後。念心を用くし。力を合せ。朝廷の大勳を勵むべし。あ人再ビ拜ゝして。恩を謝し了り。さて。皆を。あ辺の法軍に對し。一礼を叙れば。法軍。挙つて。羨ざるハ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

急先鋒索超
青面獸と
鎗術の
較量ス

紙絨を製し、民を救ふ。世名小素し敢て恢びを僭しぬ。梁中書これ
を聞て大ふに怒て云ふは、彼に汝らが云ふごとくこと遂に至る。我発して屋敷に踏り
入しが、徒の軍皮も名宿所に踏り入り、索超が東京大名府に親族も多さ
由を聞て、親族を盡く索超が宿所ふ訪ふて昇を賀し、比試を終已
に祝ひの酒宴を催しる。楊志は比度初めて大名府ふ到りて、親族い
云ふ及び朋友すらかれば門外に徘徊ふ若もおく唯独炮ふ對し、孫を抱き
寂寥に堪てず。梁中書ハ大ふ楊志を憐み、充格別に懇情を加ひし
ば。楊志も又朝夕身を委ねを竭し、勤めて光陰矢のごとくふ。
書昼夜を重て、時已に端午の節に値られば、梁中書乃ち、後堂に酒宴を設け
しめ、蔡夫人とともに汎を砂で端陽の月の日を賞し、盃已に数巡に及びける
処。蔡夫人梁中書に對していはく。相公已に立身しぬ。今日

遂に一統帥の職を授りひて、生家の重任を振り、富貴功名倶に
保ちぬ。是いかれども、乃理を知り、況や人事ふ於ては、我這般ふ冥共功名を享るハ、誠に是
泰山（妻の父を泰山と云ふ）賜之。我豈敢て此恩を忘れんや。彼に泰山一辞の力を以て。
我ふ生家の重職を掌せしを、我つねに感激に堪ざる。蔡夫人が云ふ相公
既ふ我父の恩を感じ、我父の生誕日を祝へ、ふ祝ふ、我父の生誕日を祝へ、ふ祝ふ、宜
これを賀し、梁中書云ふ。我何で泰山の生誕日を忘れんや。泰山の誕
生ハ六月十五日ふ。我来月の中旬ふ速人を方々ふ馳く十万貫の賀儀を
調へ、今已に整ひ盡く全し。宜く急ふ彼ふ送つて泰山の誕辰の慶しを。南
山の賀を献ぜ。彼れども只一つのを取りに程遠して決せず。夫人も知るごとく。
去年已ふ汗多の金銀珠玉を糸ふ繞て泰山の生辰を賀しる処ふ。泰山の生辰を賀

まで途あも重ずして賀儀の宝物乗く強絨ホに奪られ。重しく数百貫の財宝を失ひき。今に手絨を弱奴ば。今年又誰を率して好らんや。云これのみ歎嘆を夫人ぶ云相公の帳前るの美干の軍皮あり。宜く聰明才幹の者を。撰ミ出ーてつかはしめんや。梁中書が云。狂民十日の餘日あれど。手段ホハ必定支幹のあを撰ぶ。これを上策さる。夫人我が意ホ多く憂へざれとも再び盃を犯てお勧め。日も晩じ酒宴遂に竟りり。手ち北山東濟州鄆城縣の知縣姓ハ時。名ハ文彬と号しるが。一日時文彬廳の公庭に出て。法の軍皮ホを験めて。ちゆう云事を評議ぶ。鄆城縣ハ。原来狂民の皮ホ人ハるが。一人ハ歩兵狂民と。一人ハ騎兵狂民と。歩兵狂民ハ歩行の狂民二十人及び雜役二十人を管るる。騎兵狂民ハ馬上の狂民二十人及び雜役二十人を管るひる。騎兵狂民姓ハ朱。名ハ仝と号ル。身の長八尺に及ずして。

髭の長さ一尺余あり。面は棗のごく。目ハ星のごし。恰も好関雲張の相貌ホ。ハるる。人皆関雲長の綽号を奉称云と云て。乃ち朱仝を称して美髯公と云。元来尚地冨貴ハ人の子孫ニ。彼ガ人と。ハ。絨義を。きんじ。絨と。捏んじ。天下の豪傑と交りを結び。武藝ハ又千万人ホ勝れる。遂人ニ。彼歩兵狂民姓ハ雷。名ハ横と号し。身の長七尺又六寸ありて。面の色ハ紫棠の如く。鬚髯太ホ。恰も鋼の針ホ如ク。力量ハ猛人ホ。武藝ハ弦士に秀。能二三丈の溝澗を跳渡る。人ニる。彼を称して。掃翅虎と云。原是尚地ホ於て。鉄匠の子孫ニ。也ハ義を。きんじ。絨を捏んぜ。猛れども。只仝厚くして。頗る拘束ニ。朱仝雷横二人の者ハ。他に。長者の輩にハ。ぎる。故遂ホ狂民の職を。授ケて。ちゆう盗絨を捕る。を。掌る。武日知縣。ひと人を呼で云。我吹。ひ濟州に。居る。而の水郷

梁山泊の内に監絨多く聚りて。民家を劫ー〻支軍を犯す。又遠方の村里ふも。絨徒多く隠れて小人おう〻び。汝二人辛苦を辭せず〻く。我為に多く雑兵ふ狀引て。城の東西あつよりおう〻ふ分れ向て。絨徒を尋ゆ搜べー〻疑ハしき者ゆくべ速これを絆めよ。必ず居民を犯し閙をなし勿れ。汝ふ支人も宜て守つん。東溪村の山の上に一の大楓樹あ。此樹の葉のごと紅楓の葉ふ。他ふ比ふ楓の葉を數片摘れて能くべー。我此楓の葉を着い汝等が辛苦を辭せずして遠く彼此まで巡り往ーとを知りぬべー。其楓の葉を持来せばあり。支府を欺て。彼ふまでふ巡り来ざるこを知ぬべー。強ーば速に重罰を行ふて。重罪を正に〻ー。めーん。汝支人必ず楓の葉を以て我ふ示せーめ見を証據とせよ。支人の犯死命を承り。即先私宅に皈て。夫下の雜兵を使ー。已に支人城の

東西の門より出おう支強に分れて巡行ひ。先雷横ハ雜兵二十人を率して城の東門を出て此路を繞り。一連の地遠く尋ね搜して西ふ東溪村の山上に登りて。彼楓の葉ふ摘れ。再び山を下りて村中を巡り。又三三十里ばかり独て。不霊官廟の前ふて比処を見るに。殿門未ざ閉ずして大に開ける。雷横私に比殿中に絨めーんとを疑ひ。乃ち雜兵等に對して云るハ。比殿中ふハ廟祝をさもを殿門開くを稀なに。今青比殿門高く開ること奇怪なれ。絨徒比内ふ躲めーんを料ひ。兵来且擁入て。一搜ー探うんを法の雜兵ふ火把を持せ。遂に齊ー〻殿中ふへて。四方徧く火把を照ー。搜ーこる処に書燭を供る卓の下に果ーて一人の大漢ふ赤條くふ滅て。お後もちゝび熟睡せり。雷横これを見て雜兵等に聲して云。知縣相公ゆ〻ふ見明うん。我ゆ〻を東溪村まで。

巡檢司に見て果して紅に絨の急に これを捆んとて雷橫槊を揚て
大ひに吼つて罵りければ彼大漢子忽ち變こを現て。忙はしく挽挫とせしが。
二十人の雜兵一度に手を下し。遂に手を下すと。小ゝふ絆めり。雷橫大ふ
拔び乃ちこれを引せて廟外ふ出ぬ。下と引繩る。ひ絨ゆ手ん次を見て怒

○赤髮鬼醉て靈官殿ふ卧

雷橫ハ擒の大漢子と幸せ殿外ふ出られば。夜ハ曉ふ近ゝる。法の雜兵ふ
向てやるハ我軍先絨を引て。晁保正が鈸ふ釣。驚く彼ふに休息して。
酒食を索め。稍疲を慰めて。手後絨を引て縣裡に功。縣に將へ彼
絨を拷問すべし。汝ふ先我ふ隨つく晁保正が鈸に來れて。遂に絨を引
せて。直ちに晁保正が鈸へ。ゆくる。乃ち東溪村に。保正の職をうけるものハ。
姓ハ晁名ハ蓋と号して先祖代く當村に居住し。家業ハ功名のみ。

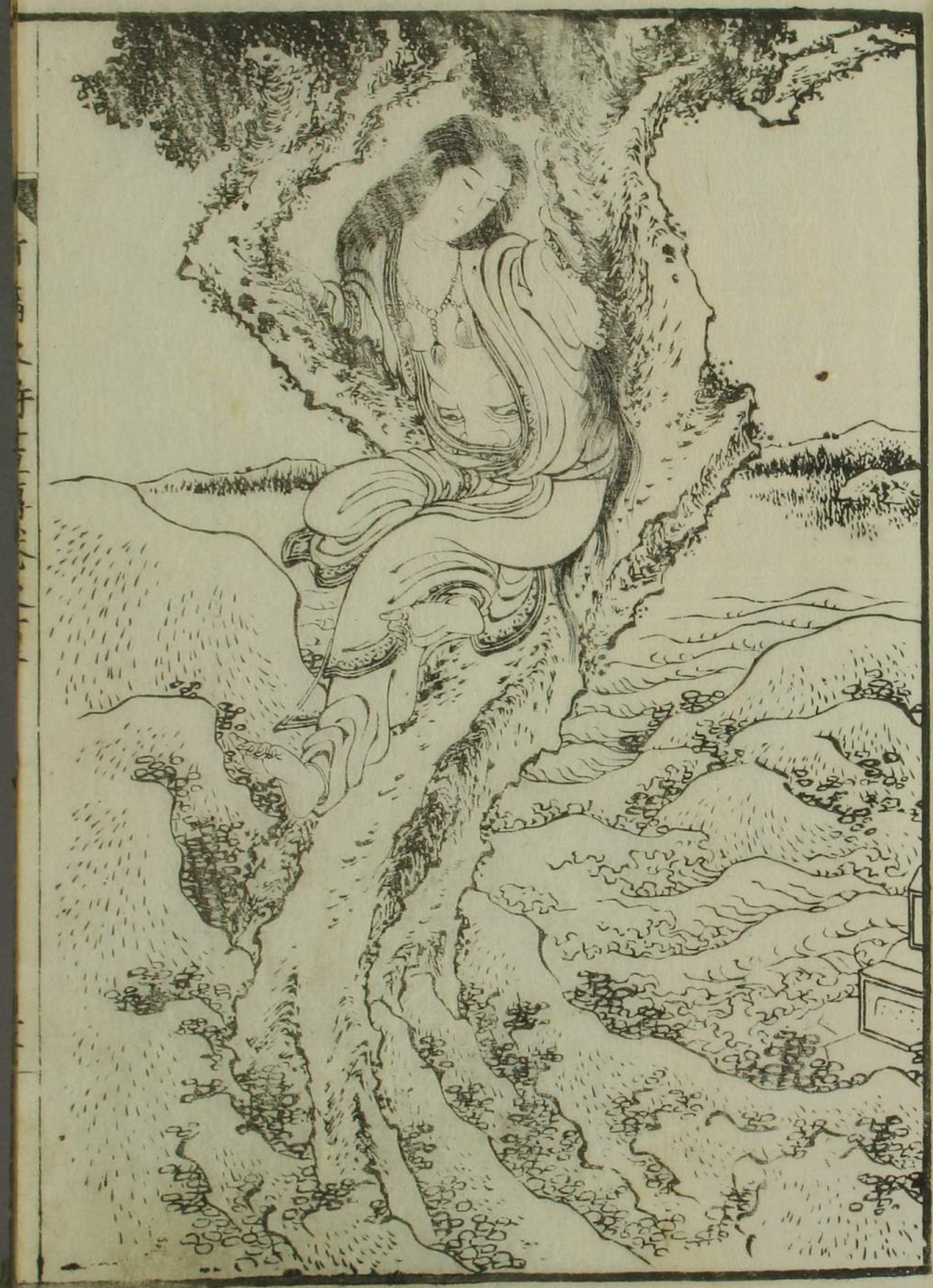
代晁蓋が為人。平生義ふ仗材を吝ばず。天下の豪傑と交りを結び。
り人あて彼が家を憑て來る時。人の若恥を痛ぜば。これを家内ふ留
亟。もゝ分抱を加へ。熱情を罄に。ちゝ人ゆゝんと欲もれば。又多く盤纏を
与へ回らしむ。るが為ふ毎度大徳を慕ふて來る者。一年三百六十日の
内にまく多し。晁蓋ゝく槍を刺。棒を使ふ。武藝に。尤も皮膚に飽
まで力あり。いまゞ妻と娶ゞ。毎日唯武藝を演習して。筋骨を熬練を
事とす。郭城縣の東つの外ふ最村里多しといへども。就中地面寛濶し
居民富饒の村ハ。東溪村と西溪村とのみ。東溪村ハ東面にて西對して手下に
一つの大ひなる溪を隔てゝ。前年代西溪村ハ。常に妖怪ありて。白日ゆも人
を魅し。溪水の内ふ引入人を害するを。たゞ多くゝるが。一日一人の傍西溪
村ふ逃て妖怪あるを。乃ち鄉人を。溪の口ふ誘引して。一つの四ゝある

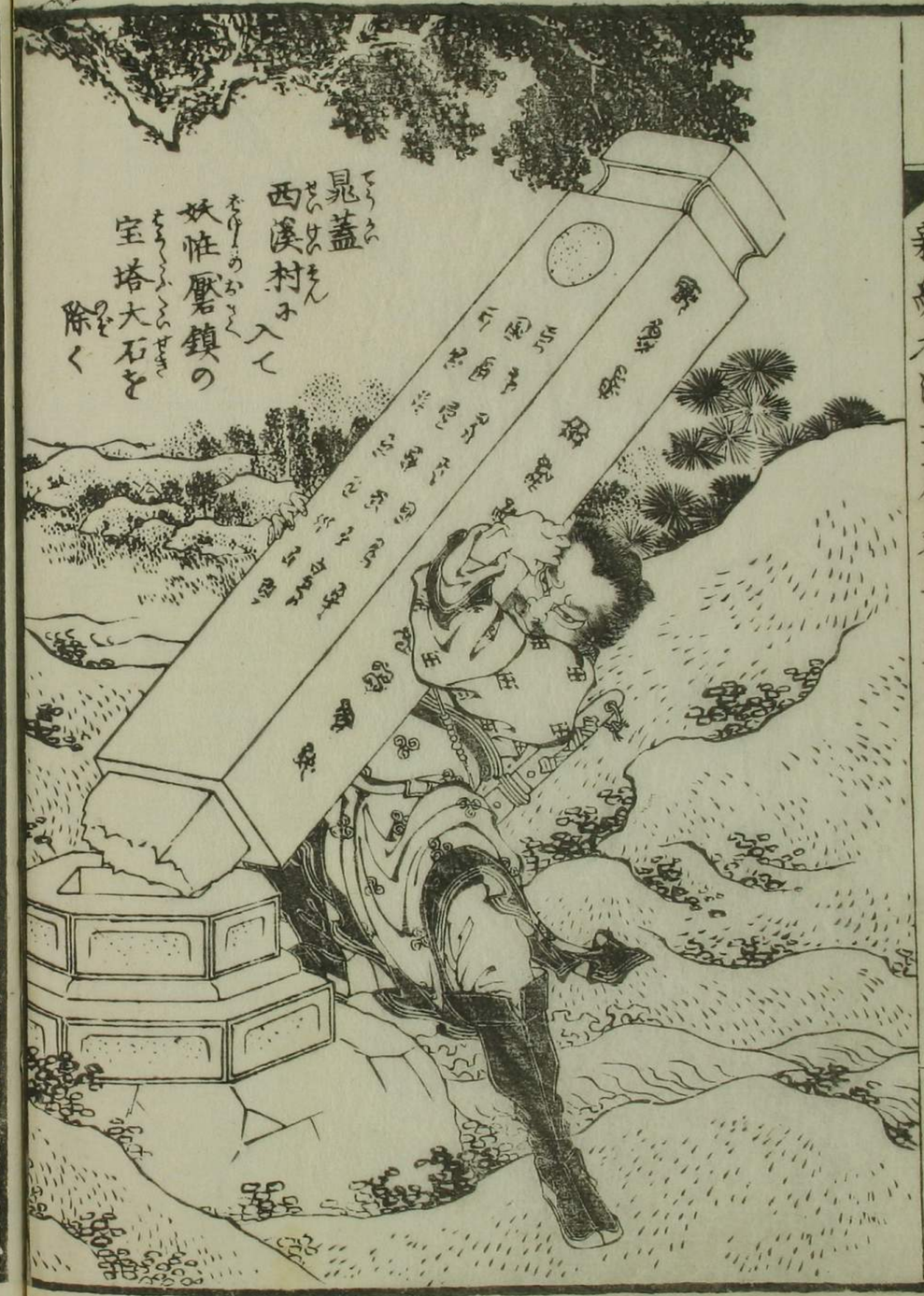
地を指ざして云るハ汝ホ仁人妖怪の災を免れんと欲せバ汝四ツの上に大ひなる青石の宝塔を建て鎮壓べし。我加持して妖怪を祓ふべし。汝ハ妖怪必ず他所に逃往んこに於て仁民等ハ迷大ひなる青石の宝塔を倩さ。ものくさ四ツの上に壓しハ奇なるを彼妖怪果して西溪村ホ蟄居するを聞バ。遂ホ東溪村ホ逃来て西溪村の人を害しれバ晁蓋これを聞て大ひに怒り。何ぞ他方の惡魔を我里に入んや。必竟彼宝塔ある惡ホ惡魔西溪村ホ住とゝ〻ばしく我里に来れり。我彼宝塔を除て妖怪を再び西溪村ホ還さんとて。私に夜闌なるに乘じ。唯独溪の口に独往て彼大ひなる青石の宝塔を。さも脆くこと托起し。遂に右の小脇に夾で。東溪村ホ居ル一つぶこれを見る人大きに怪ていとくのごとく大石の宝塔を。扶挾ん者ハ。忽しく古今ホ少なるん。竟に晁蓋ハ凡人ホハあらじとそ。見る人皆人敬ハざるハ

なくなるこれを人ゝ晁蓋を称しく。托塔天王と云訓せり（徽宗の年号）晁蓋今東溪村の保正と為て。もっぱ方の豪傑と。偏く断今の交りとなるしれば。名を海ホ名ふし天下ホ芳し。此夜雷横ハ部下の雑兵ホ共に生捕をとて。晁蓋の敵に成て門を敲さるれバ。家人ハ来ると呼て晁蓋に報る知に。晁蓋忙ハしく出迎へ自ら雷横を引て。茅堂ホ到る。此時雑兵ホハ。彼生捕の大漢子引て門内に擁入列生擒を房の内に吊上る。晁蓋先雷横ホ向て云。雷幼ハ何の公事ありて。夜も今く暁ざるに此処に来り。雷横答て云。青石の宝塔を。西溪村の命を兼て。朱仝と俱に新下を。こゝ来し。方々と巡り捜して。賊を捕へんとて。朱仝ハ先西門ゟ。出西の方一連の地を。巡り捜して。必宝塔村ホもあるとめ〻ん。柴ハ又東門ゟ。出東の方一連の地を。著く巡り捜し。方々ゟ疲れる加。著く尖鋭を借て休息せんと

欲し。敢て来て保正の眠を妨げぬ。晁蓋ゲ云。已にかく如んばせん寛ざて歌ふ。何の妨るところぞ。遂ふ酒食を設しめて。雷横を管待る。晁蓋又雷横ふ問ていく。ちゝ故郷村ふ於て。紙を捉へぬひるや。雷横答て云。前に霊官廟の内を搜しる。一人の大漢子。殿中に熟く睡りて歌ふを。見非を論ぜしてこれを捕る。這廝必定紙徒をぞめ。来て縣裡ふ引回て。知縣相公ふ訴へんと欲しこれも今夜の時れば。ちゝ。尚且保正ハ又汴東溪村を掌り。尚村ふ於て紙を捉へること。保正も告知せず。昨日義ふ縣相公事の序に因て。汴紙の来歴を。保正ふ就て問ることもあん時自然若の心ばへもあるんうと思ひ。実い告知せんとあ妨ても顧ず。直に来りしに晁蓋ふ。附して云。糸石肖之とゝ。村中を掌り。かくの

ごとく公事ハ求めて承るべき処ふ。却て故旧の告を聚ることを感激ふ堪ず。先後廳に移りのひて。快く一盞を酌ん。共に後廳ふ到る。賓主坐已に定て。彩に飲酌と催し。酒数遍巡りる処ふ晁蓋私ふ心中に躊躇して。我汴東溪村ふ原来紙あるこを稀之。彼紙を試に一見せんと思ひ。即家の老主管を呼て。是に命じるハ。汝ハ我ふ代りて。雷横に酒を勧めよ。我ハ浄手して来るべしと。遂に雷横に一礼を叙て。席を離れ。自ら一つの挑燭を持て。直に客房の辺ふ至てこれを。彼紙を乞おハ。悉く皆内ふ入て。酒を飲居れば客房の辺ふ一人の士卒もあらず。晁蓋刹家人ふ問て云。彼擒れる紙ハいづれふありや。家人ゴ云。紙ハ只客房の内に吊起とゆへ晁蓋




晁蓋
西溪村ゟ入て
妖怪磨鎮の
宝塔大石を
除く

見て叫び。急に房の戸を推開く。霧ひろがに。一人の大漢子躍り梁の上に吊起らん。一身の黒肉を露出し。両條の毛腿を抓れて。呂飄〻蕩〻として居り。晁蓋自ら挑燭を照し。彼を看るに。色黑く面濶く。鬢辺に一つの硃砂記あり。鬚は尤も多く。眼を睜ふして大ひに。晁蓋問て云。汝は何れの所より来りや。我は村中の者。汝は又誰。彼男が云。我は遠方より来りし者。本這村の一人の老軍なり。尋ねんと欲する処に。恰〻彼等来て擒て縛せり。我自ら見を免れ奔ぜる所なり。何ぞ憂とするに足んや。晁蓋が云。汝は村ふ所を訪んと欲する。彼漢子が云。我は村ふ尋ねんと欲する人は。世の豪傑なり。名は斗よりも高し。晁蓋が云。汝が云豪傑の姓名はいかん。かの漢子が云。我が云豪傑は乃ち這村の保正晁蓋と云人なり。晁蓋是を聞て恐道。彼

他は乃ち村正に非ず。偏に我を官人と云いるを。心中に思ふ。汝は何のとか為ん。彼漢子が云。晁蓋は是天下に双なき義士なり。我今天より揚り来べき富貴を捨て。汝人と為ん欲し。急に南村ふ訪れり。晁蓋が云。汝が為に我今汝を救ふと欲し。汝為後刻我が村に来て。我は又汝を助て。外甥とすべし。汝後刻我が村に来べし。我汝が幼少の時お離れしを。面を見ざること。汝と面を見ざること。彼大漢子。大ひに悅んで云。扨は晁保正にて坐すや。汝上も来て救ひ給へ。深く再生の恩を感ぜべし。晁蓋心中ふ悅び。再び挑燭を以て。房を出。急に後堂に入て。雷横ふ見えて云。既に酒を設めり。雷横が云。来て歓待を蒙り。感謝を

伝ふ事一ゲに晁蓋又盃を執てお勧め。已に数盃巡ること時窓外に天光白くなれば。雷横別を告て云。東方既に暁を催せり。疾縣狸に飯て。公事を完へいちん。晁蓋ゲ云。如況の原来友職を兼ねふ身なれば。無公事多うしん。柔豈再三留めやうさんや。翌又翌日公事に依て。遠辺とるとりなぐ。必ず敝舎に来臨を惠ゝ。更雷横ゲ云。手て何公彼さば。必ず慇懃の手紙休史して。竟ふ辞し難を起るれば。晁蓋自ら送て門外に到る。此時彼離云等も同じく晁蓋ゲ飯ふて。多くの酒食を用ひ盡く抗び。進んで那事房の内ふ入れ。生捕の漢子を急縛ること。門外に連て出るれば。晁蓋これを見て云。天晴の大漢子。実に強械放火も。做るまじ此曲者と。云もうざるに。彼漢子晁蓋を見て。大ひに呼て云るへ。此家のもいふしく。我男晁保正の名を敬ひ。晁蓋これを聞て。故意良久しく沈吟して。忽ち大ひふ怒り。汝廃料。これ王小三ゝ云て。わゝ。彼漢子ゲ云。柔別王小三ゝ。至ゝくの場ゲ災を救ひ。雷横及び部下等。此辞を聞て大ふ愕。然雷横先晁蓋ふ向て云。渠ハ保正の為ふハ。何等の縁あてか。かく認識なるや。晁蓋ゲいへく。彼ハ我外甥にて。王小三ゝ云ものゝ。彼いうんで霊官廟ふ歌るや。彼ハ別我姉の倅にて。幼に時ハ南村に居れ。後に父巣に帰て。父母に孝ひ。南柔に上りるゲ。凡十年外。南柔ふ居住し。第年彼ゲ十又巣の時。又東京商人ふ陪て。此処に来り。僅ふ七日滞留して。再び南柔に帰りしゲ。厚石号て対面せざりし。多くの人の伝へ云を承るに。渠ゲ別所に拐て好ざる二柔を彼ゲ面ハ忘れしうゞも。繁辺に一ツの朱砂記あるに因て。確に是を識認さんゲ。雅彰の称れるふ感慨も。如況我為に聖くお招へるべし。我

愛しく彼に来歴を宮ふべしとて再び彼漢子を罵て云。汝匹夫何ぞ恵に我
家に入来りて部屋に徘徊し。絨を盗るにや。彼漢子ぐ云。柔豈敢て絨
を偷んや。晁蓋怒つて。汝絨を做ぎんべいんでは擒をとめん。汝よくも舅が
面を汚しゝるなとて。雑色ぐ持る棒を借て彼を敲こにあるべ。法の人見を
除め止ていはく。保正高りに敲めくと勿れ。宮く部下めを所以を詳に問へ。
彼漢子ぐ云。那くハ我舅怒を息く我云所を問を答ぬ。柔十又歳の時。舅に対面
し。梓てうり以来已に十年を過せり。此れに柔旦暮舅の左右を憂ひ奉て。
此度不幸訪ひ来りはれに。途中に於て酒を飲し。最大碎ふ及び。舅ふ
罵られんを恐れ。且碎ふ碍して注べしと思ひ。彼廟の中にへて歌る歌
紙ふ彼宝入来るも知ず。遂ふ生擒れ。其中とも演説ば。柔舅ぐ絨を
做とるれば。公ふ怖るゝとく。いろ〻貴府ふ罪を犯さるゝを明め

んと思ひしに。晁蓋怒て汝村夫。盗ふ我屋に入て酒を飲す。途
中ふ酒を貪り吃よ。我家何ぞ汝に与る。彼我を恥辱
むるを恐て。此時雷横晁蓋を除めて保正怒を休め。令嬢を絨
を。彼さんるふいわ〻ぎれども。偖大きなる漢子廟中ふ歌ありし。加必定絨
るゝんと思ひ。強てこれを縛てひ我们をしく保正の令嬢を知ば。豈
あへて捉ふべを。冀くハ公礼の罪を赦しめんとて。乃雑色ふ命して。
絆の索を解棄しめ。自〻晁を延て。保正に還し。保正必を令嬢を
責りめ。こゝ。渾て柔が過ち。但平〻〻〻い柔が卒尓を免しゝ。
令嬢ハ又晁遠来の孤客なれば宜く歓待を尽しめ。柔いもまや
絆し別れいん。晁蓋が云。然ば〻〻又後堂ふ入めく柔別に説
話あり。雷横絆まると雖ども。晁保正に従ひ。再び後堂に入れば。晁蓋ハ

一封の財物を元出して雷横に送て云ふ所我ゐに此経儀を細ふ
べし。獅子ゆ災を免れしを祝ひのまこと。雷横辞して云ふ柴大官人
我を上に。何ぞ礼湯を受べきや。晁蓋が云ふ所是を領納ふんで乃
是柴を推て雷横が云ふすでに彩のごとくんば厚意背き難き思ふ。
是を拝受たり。吳日敢て厚意を附しかんとて。つゐに辞して縣衙へ
帰りける

○晁天王義を東溪村に徳む

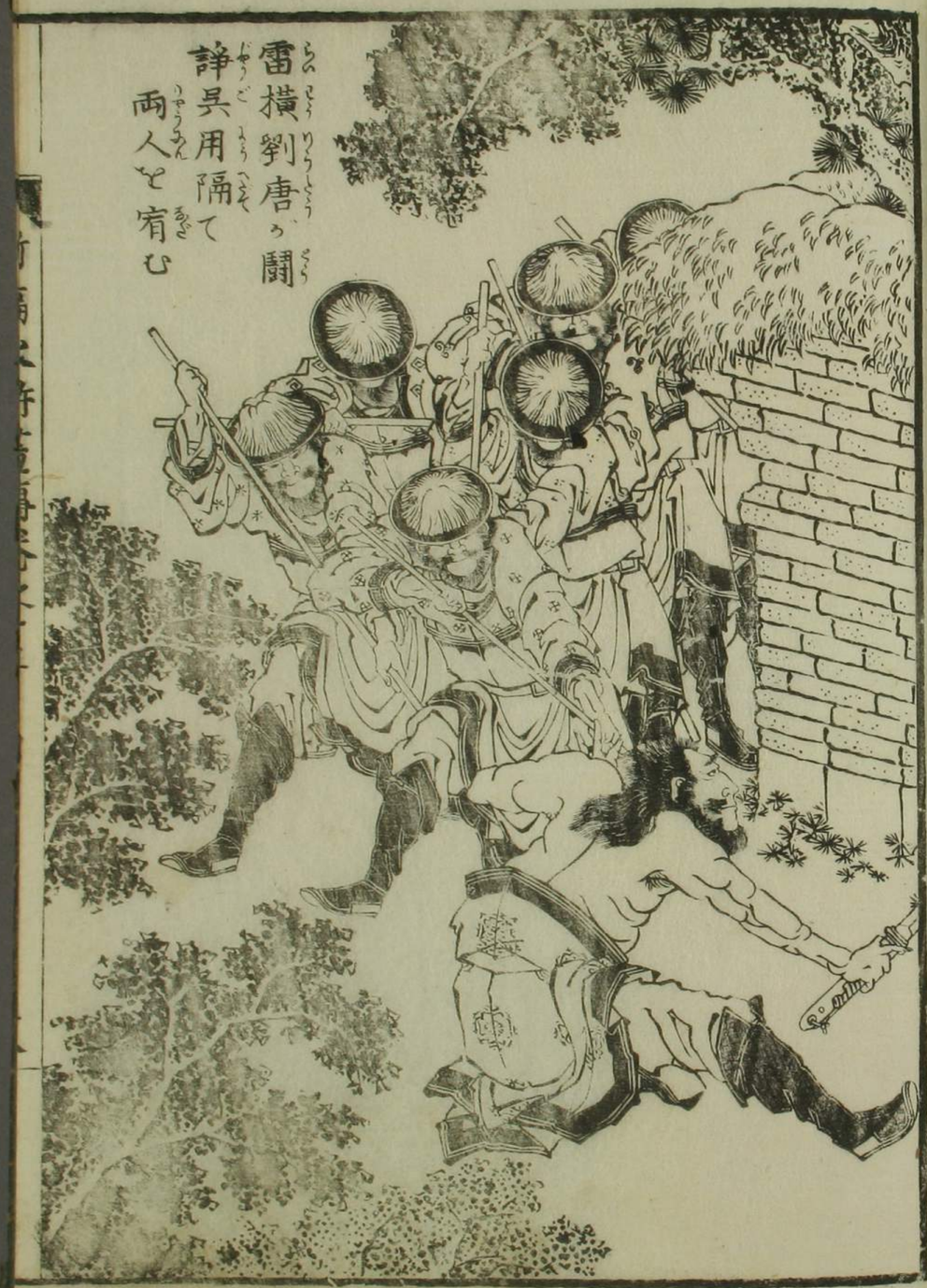
却説晁保正は彼漢子を延て後廳に通り別影しき衣服巾帽を
与へられを着せしめ。彼漢子が姓名及び住所を問るれば。彼漢子答て云ふ柴
姓は劉名は唐と号す。世く東潞州に住る。柴が繫辺に朱仝紀ある友人
賞柴が綽名を赤髮鬼と呼び。今度逃ひ。天の揚る所の富貴人を頼て。
保正に歓んと欲し。昨夜当村に来しうども第一夜も闌ふまり。酒肴酒
小肴は出ず。悲く崩中にあり。て歌る所に。彼等に捉られぬ。世俗の
諺に曰ふ。縁ふ千里来て相会し。縁なれば紙門隔てを通ずと云ふ。今
日のことなり。柴保正と初ての対面なれば保正肯て柴が記物を受ふ
晁蓋を呼び物しり。晁蓋がいふ汝が云天の揚る冨貴と。何事ぞや。
劉唐が云。柴は國は州を巡りて多く豪傑英雄の輩とお交り。往く保
正の大名を聞及びぬ。又者に山東河北ホの地の豪傑。私に朝官等が
不義の財を奪て。遠に来て身を頼て。身を義すといへども深く懼を畏て
彼等を郡中に義し。事の辨るを待て後回しゆふと。故に柴に比らび
私の事を頼て。保正小衆人と欲す。義を左右に他人あらんで心を傾け難を
吐て。残りなく晁蓋が云我家の者ハ皆我公猜こゝかも遠ふ。何しれ

いへ。劉唐が云。素性わが家大名府の梁中書十万貫の金銀珠玉を賀儀
として見せ来る途中。去年も見ふ
ばかりの。数万貫の金銀資財を獲られ。何ぞの所為なるや。半途ふ見せ棄
ぬ。今に手ぶらとなり。今年又十万貫の賀儀を近く来ふ送
て。此六月十五日の生誕日を賀すと。素熟く考へに見ハ皆百姓を剝ぎ
聚る宝なれば乃ち不義の財ニ。素こそ取られを劫し取るも。何の碍ること
あらん。此れに素此事を知て。晁保正と商議して。書翰に棄ひ入れと
欲ス。天地の神祇ふ。此事を見知ふ。素ふを罪しなんとハ。若てあ
ま。ハ。正ハ乃ち当世の豪傑ふて武藝力量方人に超ふ。人と伍へ称る。
素亦不才ふ。とも。武藝を晓せり。縱へ千軍万馬の陣中ふ
も。唯一條の棒を手ふ拠つて刺入ハ。豪弗も怯ることを。晁保正素

と弃捐ハ。ハ。一套の富貴を献ぜべし。唯ち。晁保正の言ハ。
ぞや。晁蓋が云壮る。此事最に方白。然れども。尚庭の商議ふ決
ざるを。先ず。綏くとも。強ふ。汝ハ暫く客廳に入て旅行の疲を
も慰よ。必ず心を壮ぶ。むるとも。然れども。別家人ふ命じ客廳に伴せ
ん。備劉唐ハ客廳に休息して。心小思ひるハ。我何のゆゑ。
昨夜雷横に生捉れ。已ふ云実の罪に。陷んとせしとも。孝ひ晁保
正ふ命を救られ。雷横先ふ白くと晁保正を誑く。多く礼物を贈
ん。況や我を後夜梁の上に吊起し。ば。此寛骨髄に徹て思ひ。
那廳尚未ざ遠くも。ず。我今ハ。を慕ふて退蒐。唯一撃に。雷
横を討倒し。彼礼物をも奪復し。晁保正に還さんと。遂に客廳
を出て。徐架ふ架てある。多素の棒を撰び。又力を横ふて。急に門外ふ

弦生虫ちに南を帯で逃然往渺に又墨許り驅しゝ彡果しして雷横に退
去るこう劉唐大喜に雷横を走るとまれ雷横を叱て大小孩さ壯ハしゝ。
そくべを旋し背を着れば劉唐虎のごく吼て威を震ひ拳を揮して進
来る。雷横急に極の刀をゝ拔持ゆつて云るハ汝あり我を遂来て何と
ゝや劉唐がひく。汝某忍れを知ゝば保正ゝ縁りる礼物を。速に我小還せ。
孩ゝが汝を饒すべし。雷横ゝ云我原来汝が男ゝ故る礼物を汝何の
干るこわゝん汝何ぞ私に礼物を元復さんや。劉唐が云。我等て絨をゝぐるに。
汝擅に我を生擒て。後夜梁の上に吊起剣へ男を誑て礼物を需ゝう。汝
り速に礼物を返さ我尚佛眼を以て汝を看ん万一礼物を還さんハ忽ち目
前小血を流さん。雷横これを聞て大ひに怒り罵ていく。汝親族を辱しめ家つ
を殺る溌絨ゝんぞ敢て吾礼をゝや。汝年老禍を見蓋及すべし。汝り自ゝ

愧をゝゝバ。ゝく去て自殺せよ。劉唐大小怒て云。汝奸絨科もるゝ百姓
を害して絡絡を貪るいんぞ却て我を辱しるや。我今汝を朝ゝ小
せんゝ汝ゝ是を支へんやとて。指を弄力を拔て斬てゝる。雷横これをうて。
叫くとゝ笑ひ日ゝ力を拠てゝ迎へ二人大石の上に立て互小羊生の
羝を出して鬪ゝうバ力を合ると已に六十餘回小及べども。勝に雌雄を分ゝ
代時新下の老ゝ雷横ゝ揚ゝ走ゝ忍れ一齊に机械を揮て。助け来りし
知に忽ち傷小ゝる衝に推辭さ一箇の人。ゝ小老扇を拿て走ゝ。乃呼つて
云るハ汝等の雪士先戮を休よ。我ゝく汝小ゝ働を為るとゝ久し。必誤こそ
ゝれゝて生廟を汲て酒中に隔りられを。衣人遂に戦を止力を收劉唐子
の外小逃ぬて。彼人をゝるに傷者の粽来ゝて。汝小梁汝巾を載き。ゝ
皂布衫を着し。傷ゝハ茶褐帯を繋ひ。ゝ小貌然も又人小勝れ眉潔く


雷横劉唐ゥ鬪
諍呉用隔て
両人ヒ宥む

目秀て面白く鬚脩しの人乃ち姓は呉名は用字は学究綽號は智多星。乃号は加亮先生と云世く南江の人なり。此時呉用密扇を扇て劉唐を指て云。汝何の様なるとみて敢て対し欲とするや。劉唐眼を睜て云。汝ごとき儒者の干るとこれあるべし。此時雷横先呉用に向て云ふ。呉用先生いまゞ彼を知りぬまゞ。昨夜彼漢赤縄くふりて霊支廟の内に睡り居る。彼を絆縛て。速に晁保正が皷に到る。而に豈知らんや。彼系晁保正が甥に故に系肯て。晁保正が為に彼を饒しられど晁保正がこれを感ぜて系に礼物を送りは。彼れに系が法に随ひ退来り。擅に再び礼物を元復さんと欲す。是豈大胆の徒にあらずや。呉用是をゆて心中に思ひるゝ。我と晁蓋とは竹馬の友なり。何等の事ある時は刑我と商議に。此ゆえに交を厚し。晁蓋が親族は皆我知る所なり。彼を我をして渠が甥あることを

ならば。彼が交を厚甥の年甲もおなじせされば。此中よ必ず蹺蹊あらん。我先彼が二人を疎して。呉用を個へ。汝又蹺蹊を要しと問べしと思案して。呉用又劉唐に向て云ふ。汝必ず誤て。礼とするゝ我と汝が甥こと。交り極く親し。我又此敢にも交り深うして。汝が甥既に此敢に礼物を送りんか。汝是を元復さば。却て甥が面を壊ふべし。汝宜く我云を用ひて怒を呑めんや。劉唐が云。儒者汝いまゞ所ゆと知りぬまゞ。彼礼物は我甥に心して送りとるにあらず。彼雷敢に我甥を誑て求めとる礼物を。彼も我に還さるべし。雷横が云。此礼物を元還さんとすゝば。汝が甥自ら来て是を取け。我是を還さん。我何ぞ肯て汝に還さんや。刑唐が云。汝弥還さるべ。且我なの肉の力に負ふべ。力ならん汝を殺さば。我も又汝を饒すべし。呉用又勧めて云。汝ふあ人すでに今日なり

鬪しうとも。爰て唯雄かゝゞ。汝ら幾遭難ふとも。矣哉揚頁交すまじ。吾
蓋の力を竭もとゝるれ。刑房ゝ云。我彼が首を取もんが誓て大丈夫とゝるれば。
雷横限なく恚ていはく。我等雖ども世の力を借て汝を殺さん。豪傑の俊
ふゝゞ。我兵士力一挺を以て立地に汝を殺さんとて。二人一齊に刀杖揮て
再ゝび鬪んとゝるれば呉用又再三再に徐といへども。遂ふ遮ゝ留るを能ば。
已に為人近くとゝるを素而に。晁蓋為を慕ふて弛来ゝ。遂に武而ふ為て大に
刑房を罵り又詐て云小三汝畜生何ぞ為ぞ敢て礼をゝるを。
武時呉用ふ咲て云保正良ゝ来ゝるはずんば必ず猥ふべきに。奪ひの郊に
来ゝるなり。晁蓋再び戦の発端を問ゝるれば。雷横先言ていはく。保正の嘱
剣戟を揮て来ゝ迫来ゝ。彼縁ゝる礼物を頻ふふ復さんと云ゝ。
自已に保正に還さんは格別彼に渡まべきれるゝが為旨を述ゝるに大ふ

怒て。ついふ来ゝと又十数合と鬪ひ晁蓋ゝれを呼て。大ふ刑房を罵て云。汝奚ぞ
敢のごゝ。無礼とゝるや。ゝく敢て恐しして罪を謝せゝとて乃又雷横ふ
對して云ゝるは来ゝ。彼が不為を知ゝざるゝ。敢くい平生の好を思ひて武罪を
免ゝるゝや。雷横ゝ云。保正武事を知ゝるまゝ。来ゝ老早ゝれを恩ぬ何ぞ
必ゝも慇懃の礼を以ふゝん。来ゝ毛既ふ怠ふ掛るとゝる。敢くい保正も来ゝ重ふ
ゝけるふゝとゝ遂に保正呉用ふ別れて。縣裡へぞ帰りぬ。扨呉用ハ晁蓋ふひ
るゝは保正ゝ片時遅く来ゝるゝ必定大事に及べきふ聲ひの前ふ来ゝり
ゝひゝり来ゝ彼令嬢の武藝を見ゝ。天晴の達人ゝ。雷横ハ原来遠近ふ
漏れゝ勇士ゝれども。令嬢に敵ゝ。兵架隔ふゝて危ゝ。第再三
戰ふゝ。後に令嬢の為に敗ゝ。ゝく武令嬢ハ何れゝ来ゝるゝ。
来年来ゝ敵に出入ゝ。ゝて見ゝるとゝ。又令嬢ゝるとも

哭して晁蓋が云、系今先生を陪て共に一車を商議まんと欲せし処、彼者雷横既
と闘ふを見て忙しく、氏而に逃わり。先生彼を懲懲めぬは充理なり。先生系の
鉞ふ走り出て、来歴忽ち知れぬ。晁用が云、已ふかくの如んば、実に鉞に逐はさん。
驚くこと限なし。少頃系うんとて先私宅へぞ帰りる。氏時晁用い讀書の師を
なして毎日門弟多く来る。乃宅を不見へて云るい。系今日急事あり。他
出いたす。乃晁用ふ問来るべしと要しく。重て再び門
外ふ出。乃晁蓋刘唐に引れて。晁蓋が館ふ帰り。亟に後堂ふ入て賓主坐已
に定りれば。晁用晁蓋に對し。刘唐が事を官て云。彼人実に保正の為ふい
准なるぞや。晁蓋が云。彼人ハ是当世の豪傑。姓ハ刘名ハ唐とや。東潞州の人
なるが。武艺一套の富豪と系ふ与へんとて。北京高村ふ逐れしうど。酒を
碓る由。碓と碓して千後系が鉞を訪んとて亟に霊皮廟の内ふ入て。

背く体ニ振れる処に雷横既ふ追て廟中ふ走り。倶て絡るゝんと欲ひ遂
に生捉て系が鉞に走りる由。系作て舅甥の挨拶をなし。遂に雷横を歌
て彼人を救ひね。さて一套の富豪と云い何ぞ逃れが氏度小系大名府の梁中書
十万貫の金銀珠玉を系に送て丈人蔡太師が誕辰を賀すと。充近
日此辺を通ると云沙汰ある由。刘唐系と公と合せ是を奪ひんと欲ひ系
思ふに是らハ皆氏を聘て集めるる不義の財なれば。ひこれを劫し取るも
少も罪のあるとなきまじ。況や氏一事。系が邪欲の為に意ぜり。さ為いかを
えれば。乃北斗の七星ぐちふ我屋の脊に隠れり。又を肉に格別ふ一の小
星あり。一度の白光と化して飛去れり。我是を思ふに是屋を照すハ忌ぞ
利めゝん。絡ふ今果して氏一套の富豪耳ふ触。先生我が為にこれを設し
て呉用これを受て歩西ていく。系刘公の模様何とやゝん遶嗟ありけ

なる成人て彫る十に八九も世を棄せり。此一事を好と以ども。狂いまゞ全くざる所あり。之れいんとなれば。此事人多くして成難く。又おくして成ゞ已き。然ル彼多の家人をとり以ば。此業ハ一人も到るに足ず。今唯保正。劉公系三人のみ。此事狂傲就せがたし。保正劉公らに武勇勝れると以ども。這等の大事を食く為ること能ふまじ。凡八人の豪傑と雖ども必ず成就すべし。八人の外多も不可なるん。又おさも不所なるんん。晁蓋ガ云。先生少して八人の数を定めるハ我美の星の数に意じ。ふや。呉用ガ云。保正の此美ハ天より託る靈美ホて。心より作虛美にあらざれいよりしく美の端に意ずし。此辺ホも狂又此を勧る去るべきに。宋公明ハあらざるやとて三人齊く既を低て。ホバし流吟なるるガ呉学究先ホ辺に。三人の豪傑あるを思ひ出し。劉保正列唐に對して云るハ系李ひ三人の豪傑あるを思ひ出せり。此三人皆武藝高ホ秀。力量も亦卓越に共に水火の中ホも独入て。死を厭ハしせを等ふまる義士なり。此三人を招くひるバ。此事ハ易成就すべ。晁蓋ガ云。三人ハ何等の豪傑ぞ。姓名ハいん。又孰の所に居るや。呉用ガ云此三傑ハ系兄弟三人ぞて。濟州梁山泊の辺。石碣村ホ住し。考に魚を約て業とし。姓ハ阮ホして。一人ガ名ハ立地を歳阮小二と号し。又一人ガ名ハ短命二郎阮小五と号し。又一人ガ名ハ活閻羅阮小七と号し。此三人系同胞の兄弟ぞて。能てよく義を重んず。系系遭那里小数年住して。彼兄弟等ガ民を見しに。独も文筆ることハ無ども義をもり侠を執る。故に系彼三人ハ微の豪傑ることを知て。考に親く交り。また来往せり。系此村に暫ての後。今已に三年の後。彼等に對面せば。第此三人と共に。大事必ず成就せん。晁蓋ガ云。我も考て阮家三兄弟の名を聞り。石碣村ハ此処

僅一里まへ迎ざる所なれば急に人を発して。これを邀ゞ可るべしや。呉用が云。義使と称へ、邀バ渠必ず来るまじ。素自ら彷三寸不煙の舌に憑て見を伏バ方ふ能伏せて後に誘引して回るべし。晁蓋大に悅て云。先生の肯て自ら行ぬべ。何の患うあらんや。ならば何れの日に発足あるべきや。呉用がいへく事すでに此に至り一刻も急に行べし。乃ち今宵三更の時おこなば。明日午の刻ほは彼地に到ん。晁蓋が云。今宵発おこなわば。元宵の夜。先一盃を攻めんとて刑家宴を設て。已に飲酒をゞ始める。呉用又云。ふ京より東京に往来数多の路筋あり。いまゞ彼梁中書が十万貫の賀儀の貨物ハ何れの路より来るとを知べし。刑公より辛苦を辞せびして。急に東京の路ふ赴ク彼賀儀の貨物を見て何れの方より来るやらん。詳に吟味け為り。既じめ好き準備を備すべし。刑庵が云何の辛苦の事うあらん。乃ち今宵源庵ふ宗じて独行ん。呉用云。尚太早し。蔡太師が誕生六月十日と聞。今ハ既六月の首なれば。正又十日の猶限あり。余先三阮兄弟が方に趣き彼等を誘引して立ゆるの日。刑公又北路に出るべし。晁蓋が云。先生の云極て能。刑公ハ愈我飯に逗留して呉先生の帰らるを待べし。時酒も数巡して漸く三更の太鼓ふ成しが。呉用ハ時をでに三更なるふ。寔ふ去立ん。として遂に席を起て門外ふ出られば晁蓋刑庵もをでふ門外まで送り。呉用は刑家人ふ辞して源足に信せて急ぎ路を趣く。翌五日の午の刻石碣村に到り着ス。三阮が消息いかんや。次の巻ふ詳なり。

新編水滸画傳卷之拾三 畢